

アンコール遺跡群の 水の景観

1 はじめに

2012年1月にカンボジアのアンコール遺跡群を初めて訪れる機会を得た。実質4日間という短い日程であったが、アンコール遺跡群の水の景観のあり方を実見し、遺跡における水の景観とその意味について考えてみた。

いうまでもなく、アンコール遺跡群は卓越した石造建造物群を主要構成要素とする9世紀から15世紀にかけてのクメール王朝の首都一帯の遺跡であり、1992年にはユネスコ世界遺産リストに記載されている。本稿の記述は、アンコール・ワット、アンコール・トム主要部、東方の東バライ跡や寺院遺跡群、西方の西バライ、さらにシェムリアップ川源流のクバル・スピアンなど、原則として今回の訪問で実見した遺跡群を対象としたものであることをあらかじめ断っておきたい。

2 水の景観の類型

アンコール遺跡群の主要な水の景観は、概ね5つに類型化することができる。すなわち、寺院等の外周を大きく囲う「外周環濠型」、寺院等の主要部を囲う「主要部環濠型」、長方形の池を参道の（原則として）両側に設ける「参道側池型」、長方形または正方形の池を単独あるいは複数で設ける「修景池型」、築堤あるいは掘り込みにより造営した大規模な長方形池の「溜池型」である。さらに、これらの分類には入りきらない少数の事例もある。以下、各タイプの水の景観について事例を挙げながら取りまとめておこう。

外周環濠型 遺跡群きっての大規模寺院であるアンコール・ワットは幅190mの環濠で囲われている（図16）。アンコール・ワット自体の敷地は東西1.5km、南北1.3kmであり、環濠の存在が建築群の壮麗さを引き立てるのに大きく寄与していることは誰もが実感するところである。バイヨンを中心に置き王宮区画なども含むアンコール・トムも、外観的にはアンコール・ワットのものほどの存在感はないとはいえ、幅100m、全周12kmの外周環濠に囲まれる。さらに、バコンも中心祠堂群の標高からは相当低いところまで掘り込んだ外周環濠に囲われる。

主要部環濠型 アンコール遺跡群中心部の北東方約20kmに立地するバンテアイ・スレイは、伽藍を平面的に展開する平地型寺院で、その中心祠堂群を環濠が取り囲んでいる（図17）。環濠は幅10mほどで、祠堂群の建つ敷地からの深さもさほど大きなものではない。また、タ・ブROOMも本来は同様に伽藍主要部が環濠で囲われていたことが知られる。このほか、タ・ネイでは、中心祠堂群の軸線と平行するかたちでその両外側に濠が築造されており、この型の変型と捉えることが可能かもしれない。

参道側池型 アンコール・ワット内部の西参道の南北両側には2つの長方形の池が配されて、祠堂群を映す水鏡となっている（図18）。バイヨンの東参道の南北両側にも2つの長方形の池が穿たれる。橋状の参道が特徴的なバプーオンは現況では参道の片側のみに池がある。参道側池は他の寺院でも散見されるが、比較的小規模で、加工石材で階段状に仕上げた護岸を持つことが多い。

修景池型 アンコール・トム王宮区画内には、「男池」（図19）「女池」と俗称される大小2つ並びの池がある。平面形状はいずれも長方形で、加工石材による階段状の護岸を持ち、最上部の石材には精緻なレリーフが施されている。ジャヤ・タターカの中心寺院ニャック・ポアンは、伽藍内に正方形の池を組み込んだ装飾的な構成で、中央部の5つの池が修復されている。

溜池型 東西8km、南北2.1kmの西バライ（図20）は、東端部を除き現在も満々と水をたたえる。前述の中心寺院ニャック・ポアンを擁するジャヤ・タターカは北部の一部が季節的に冠水する以外、水面は消失している。インドラ・タターカと東バライも既に水はなく、かつての池水域はほとんどが農地化され、それぞれ中心寺院のロレイと東メボンが周囲の旧池水域から一段高い遺構として残る。以上の築堤型の溜池に対し掘り込み型の構造をもつスラ・スランは、今は消滅した寺院に付属して築造され、後に改修されたものとも言われる。東西700m、南北350mとバライに比べ平面的には小規模であるが、加工石材を用いた護岸や西岸の装飾的な上陸用ステージからは大規模な修景池の様相もうかがえる。

その他 シェムリアップ川の源流クバル・スピアンでは、源流周辺の岩盤等にレリーフを彫り込み人為の領域としての水の景観を創出することで、場の神聖化を図っている。西バライの中心寺院である西メボンは、バライの水



図16 アンコール・ワット
外周環濠



図17 バンテアイ・スレイ
主要部環濠



図18 アンコール・ワット
参道側池



図19 アンコール・トム
王宮区画の「男池」



図20 西バライ 右上部の
島(↓)が西メボン

位観測のために伽藍内に水を引き込んで特異な景観を見せていたらしいが、今はバライ全体の堤防嵩上げによる水位上昇にともなってほぼ水没・崩壊の様相を見せる。

3 景観要素としての水の重要性

造営当初の水面の機能 それぞれの水面は、当初どのような目的を持って造営され、どのような機能を持っていたのか。

B.P.グロリエは1979年に有名な水利（水力）都市論を発表し、バライ（築堤型の大規模な溜池）が水路等の水利関連施設と合わさってシステムとして機能し、灌漑による生産機能の保障をはじめとした実利面と水への畏敬を表す宗教空間としての象徴面の双方を具現化したことを指摘した。グロリエ説、特に灌漑機能に関する部分に対しては肯定的または否定的な諸説が提出され、その当否はいまだに結論を見ていない。しかし、バライや外周環濠の大規模なものは水を制御する高度な技術力と膨大な労働者を徴発する政治権力がそろって初めて可能となる営造物であり、そこに農業生産力の増大に寄与するという実利がなければ、長期間にわたって次々とこれらを築造することは為政的にも極めて困難であったと見たい。そう考えると、溜池や外周環濠の大規模なものが灌漑を含む複合的機能を持ったことに疑念の余地はなく、灌漑機能を念頭に置いたグロリエ説は大筋で支持されてしかるべきだと思う。アンコール・ワットやアンコール・トムの外周環濠は表向きには荘厳の意味が強調され、バライにおいても水面の中央部に寺院を祀ることで宗教的意義が表現されたとしても、地域の水環境システムの観点で考えると、そこに灌漑や都市水利の機能が第一義的に組み込まれていたことは確実であろう。一方、比較的小規模な主要部環濠型や参道側池型、修景型の水面は、荘厳や修景が表向きの主たる機能であろうが、実質的には敷地内での雨季における調整池としての機能的要請に答えることがむしろ主眼であったと考えることができる。

遺跡景観としての水面 1860年にフランス人アンリ・ムーオに「発見」されたアンコール遺跡群はその傑出した歴史的・文化的価値により、紆余曲折を経つつも、現在は世界的な文化遺産として多くの訪問者を魅了している。

アンコール・ワットの参道側池に見られるように、遺跡群における水面のいくつかは壮麗な石造建築群を映す水鏡として意識されることが多いかもしれない。だが、この地の風土と歴史の中で、建築群と不可分のものとして一体的に築造された各種の水面が「人が生きられる空間」としての水の潤いを訪問者に無意識下で体感させ、満足度の増大に大きく貢献していることも忘れてはなるまい。

4 望まれる動態保全

各種形態をもつアンコール遺跡群の水面は、その景観を構成する要素として重要な役割を果たす。あわせて、クメール王朝の高度な土木技術を示す証左としての重要な遺構でもあり、なおかつ大半は雨期における調整池として今も機能している。こうした水関連施設遺構の保全にとって、持続的な使用による保全すなわち動態保全こそがおそらくもっとも適切な方法であり、そのためには導排水路も含めた日常的な維持管理や中・長期計画にもとづく定期的な改修が不可欠である。このことは、遺跡群の水の景観を良好な状態に保つだけでなく、地域の水環境システムの保全にも寄与することは言うまでもない。

本稿は数日間の現地見学を基にした印象記程度の試論であり、アンコール遺跡群の水の景観をもれなく踏査しての考察ではない。理解や認識の不足または誤りによる記述については、ご叱正をいただければ幸いである。今後、現地でのさらなる調査の機会を得ることができれば、先行研究成果を渉猟しつつ、アンコール遺跡群の水の景観について考えを進めてみたいと思っている。

(小野健吉)

参考文献

- Hisashi NAKAMURA "Baray as a Storage for Buffer Water in the Angkor Period," 『上智アジア学』 18, 2000.
- 佐藤恵子「アンコール王朝における王とバライの関係」『上智アジア学』 28, 2010.
- 石澤良昭編『アンコール・ワットを読む』 連合出版, 2005.
- ブリュノ・ダジャス (石澤良昭・中島節子訳)『アンコール・ワットの時代一國のかたち、人々のくらし』 連合出版, 2008.
- Jean LAUR *Angkor*. Flammarion, 2002.
- Marilia ALBANESE *The Treasure of Angkor*. White Star Publishers, 2006.